ベーコン　Bacon,Francis　1561～1626

イギリスの哲学者・政治家。デカルトとと共に近代哲学を確立した。
貴族の末子としてロンドンに生まれる。ケンブリッジ大学に学んだ彼は、駐仏大使の随員として渡仏、その後下院議員として政界に入り、検事総長・枢密顧問・国璽尚書(こくじしょうしょ)・高等法院長等を歴任した。しかしながら、1621 年 60 歳のとき、収賄の嫌疑で弾劾を受け、一切の地位を失って余生は勉学と著作にふける日々を送った。
ベーコンは自身の主要な仕事全体に「大革新」の名を与え、壮大な構想を練った。「知は力なり」と主張した彼は「大革新」の序言の中で、既存の学問への批判、新しい学問を築いていく上での困難、学問を新しく出発させる方途等を巧みに述べている。学問の近代化が起こりかけていた時期に述べられたこの思想は、第１部所収の『学問の尊厳と進歩』(『学問の前進』のラテン語訳)へと続けられた。結局は未完成に終わったとはいえ、『ノヴム・オルガヌム』を含むこの「大革新」は、近代思想の出発点となっている。
彼の著作としては、「大革新」以外にも、英文学史上優れた散文集とされる『随筆集』や、ユートピア文学ともいえる『ニュー・アトランティス』が有名である。

Great Books 21　ノヴム・オルガヌム(Novum Organum)

『ノヴム・オルガヌム』は、ベーコンが国璽尚書と大法官を兼務していた 1620 年、「大革新」の第２部として刊行された。
『ノヴム・オルガヌム』という書名は、アリストテレスの論理学的諸論著『オルガノン(道具・機関)』に対抗してつけられた。すなわち、アリストテレスの方法が一般的原理から特殊な原理や事実を導く「演繹法」であったのに対し、ベーコンの方法が、個々の特殊な事実や命題の集まりから共通する性質や関係を取り出し、そこから一般的な命題や法則を導き出すという新しい(ノヴム)方法、いわゆる「帰納法」であったことに由来する。
本書は、「序言」(１巻)と「自然の解釈と人間の(自然)支配とに関するアフォリズム」(２巻)から構成されており、長短種々の断章からなるが、内容上は連続したものである。
第１巻(130 章)はいわば、既存の哲学や人間知性の批判を行う「破壊の部門」であり、第２巻を理解するための導入部である。この巻で、彼は人間と自然の関係を考察した上で、自然に従いこれを正しく解釈するためには、人間が持っている種々の誤った先入観を取り除く必要があると考えた。これが**イドラ**の除去と呼ばれる概念である。
第２巻(52 章)は「建設の部門」であって、ここでは自然を正しく解釈する方法が述べられており、前述の帰納法が使われている。実験的方法とも呼ばれるこの方法は、近代自然科学の方法につながる新しい方法であった。
このように、旧来の学問の性格と方法にひそむ非生産性の鋭い批判や、新時代の学問の実証性と生産性に対する鋭敏な感覚と徹底した方法意識を示したことで、本書は、思想史的意義からも、また、近代学問の出発点としても重要な位置を占めることとなった。

Key Word　イドラ(幻影・偶像　idola)

すでに人間の知性を捕らえてしまって、そこに深く根を下ろしている「イドラ」および偽りの概念は、真理への道を開くのが困難なほど、人々の精神を占有するのみならず、たとい通路が開かれ許されたとしても、それらはまたもや諸学の建て直し(革新)のときに出現し、妨げをするであろう、もしも人々がそれらに対し、前もって警告されていて、できるだけ自分を守るのでないかぎり。
人間の精神を占有する「イドラ」には四つの種類がある。それらに(説明の便宜のために)次の名称をつけた、すなわち、第一の類は「種族のイドラ」、第二は「洞窟のイドラ」、第三は「市場のイドラ」、第四は「劇場のイドラ」と呼ぶことにする。
正しい「帰納法」によって概念や公理を作り出すことは、「イドラ」を遠ざけ取り除くためには、たしかに本来的な療法ではあるが、しかし「イドラ」を指摘することも大いに有用である。
＜桂寿一(訳)『ノヴム・オルガヌム(岩波文庫)』　岩波書店＞

※(四つのイドラ)

種族のイドラ　一般的な先入観。人間の持つ不完全な機能や思惑のままゆがめてみる傾向をさす。
洞窟のイドラ　各個人特有の偏見。精神的肉体的特性や教育・習慣からくる偏見。
市場のイドラ　人々相互の結びつきからくる。特に言葉に関するもの。
劇場のイドラ　学問(特に哲学)にみられる伝統的権威的な欺瞞をさす。

◆ *Great Books 文献案内*

📖 ノヴム・オルガヌム(新機関)(岩波文庫)／桂寿一(訳)
岩波書店　１９７８年刊　２５３ｐ　＜ｲ133／ﾍﾞ＞　資料番号 12249983

📖 Great books of the Western World vol.30　Francis Bacon／Robert Maynard Hutchins(ed.)
Encyclopaedia Britannica　１９８９年刊　２１４ｐ
＜080／G／30＞　資料番号 20257457

◆ *理解を深めるために　　参考文献案内*

📖 ベイコン(イギリス思想叢書)／塚田富治(著)
研究社出版　１９９６年刊　２５０ｐ　＜133.2FF／105＞　資料番号 20890695

📖 フランシス・ベイコン研究(イギリス思想研究叢書)／花田圭介(責任編集)
御茶の水書房　１９９３年刊　３００，４６ｐ　＜133.2BB／103＞　資料番号 20599221

📖 ベーコン随想集(岩波文庫)／渡辺義雄(訳)
岩波書店　１９８３年刊　３２７ｐ　＜ｲ133／ﾍﾞ＞　資料番号 12249991

📖 フランシス・ベーコンの哲学／石井栄一(著)
石井栄一先生退官記念出版会　１９８２年刊　４０２，１６ｐ　＜133.2N／15＞　資料番号 12304028

📖 人類の知的遺産 30　ベーコン／坂本賢三(著)
講談社　１９８１年刊　３８２，６ｐ　＜280.8K／13／30＞　資料番号 10497352

📖 学問の進歩(岩波文庫)／服部英次郎，多田英次(訳)
岩波書店　１９７４年刊　３９６ｐ　＜ｲ133／ﾍﾞ＞　資料番号 12249975

📖 世界の名著 20　ベーコン／福原麟太郎(編)
中央公論社　１９７０年刊　５５８ｐ　＜080／5／20＞　資料番号 12784385

📖 フランシス・ベイコン／ベンジャミン・ファリントン(著) 松川七郎，中村恒矩(訳)
岩波書店　１９６８年刊　２５６，８ｐ　＜133.2／2＞　資料番号 10211993